

あさひ

# 旭木の駅①（愛知県） 3カ月で立ち上げ

「これを旭でやろまいか」

「彦平」の刺身なんか日本一高くてまずいぞ、とおやじが言う。

だから俺も行ったことなかった。

旭木の駅実行委員長の高山治朗さんが話し始める。「けど、モリ券の期限が切れそうだったので、しようがなく買いに行った。そして、これがうまかつたんだなあ！」。

豊田市旭地区で日本3番目の木の駅が立ち上がったのは2011年3月5日、ちょうど鳥取県智頭町で第1期木の宿場プロジェクトの報告会開催の日だった。前年の12月11日、私は地域のキーパーソンであり豊田森林組合の専務でもある林富蔵さんをふらっと訪

ねて、恵那市や智頭町の木の駅の話をした。林さんは全く動かない

地域と林業の将来を嘆いた。それが、私のノートパソコンで木の駅のTV録画を見るうちに顔色が変わった。「これを旭でやろまいか」。

展開は早かった。12月27日には約15人集まり準備説明会、1カ月後の1月26日には木の駅説明会で山主、商店、よそ者が40人近く集まり、3月5日のオープンが決まった。こんなに短期間の立ち上げはその後も例がない。

## よそ者を受け入れる 度量と危機感

旭木の駅の人材はバラエティに富んでいる。12年は「木の駅女子部」まで出現した。森林ボランティア

イアの活動も盛んだ。よそ者たちが超元氣なのだ。彼らを受け入れる度量と危機感がここにはある。

旭町では小学校が一つ廃校になったばかりだ。人口は3050人、小学校入学者数は15人にまで減少した。そんな中でIターンカップルが一昨年に続き昨年も一組、村の神社で結婚式を挙げ地元の人たちの祝福を受けた。そんなよそ者と地元をつないでいるのがNPO法人スローライフセンター事務局長の西川早人さん。林さんと一緒に地域に声をかけ木の駅を立ち上げていった。

集まった木材は製紙パルプチップ会社が3000円/tで引き取ることになった。出荷者に支払う6000円/tとの逆ざや（過払

い分）はNPOの自己資金と寄付で賄うこととなった。大口寄付があった。市民団体の「組手什おかげまし東海」が10万円の寄付を申し出た。組手什は製材端材を活用した組立キット。その代金の5%を木の駅の立ち上げや運営に支援することにしてきた。さらにチップ会社の社長や地元の旅館や土建屋さんをはじめたくさんの人々が寄付を持ち寄った。

そうして始まった第1期は3月5日〜3月27日、出荷者30人、商店19店、出荷量90tだった。第1期のモリ券長者が、14t出荷した高山さんだった。

## 出荷量トップは 40年ぶりのUターン者

高山さんは、2010年長男の就農を機に会社を58歳で退職して、40年ぶりに実家のある旭町に戻ってきた。そんな矢先に木の駅が始まった。「息子は自然薯の専業で俺は田んぼや畑、それに山をやることにした。とはいっても、チ



◀旭木の駅のオープン日。2011年3月5日



◀旭木の駅実行委員長の高山治朗さん。オープンから20日間ほどで14tを出荷



◀「これまで来なかった地元のお客さんが来るようになった」。地元商店主の一人、糟谷勝商さん

「彦平」店主の糟谷勝商さんは、「木の駅でこれまで来なかった地元のお客さんが来るようになった。」

いまや高山家の御用達になった

エーンソーも使えなかったのが秋にとよた森林学校に入って習った。それでさつそく間伐を始めた時、ちようど木の駅が始まったってわけさ。モリ券は面白い。心が贅沢になるなあ、ついつい大買いしてしまう」と振り返る。

オヤジ達はモリ券で豪快にお酒と刺身を買っていく。それがこの頃ちよつと変わってきた。奥さんたちがモリ券で買い物するようになった。美容院でも使う人が増えてきたぞ」と笑う。

3年目4期目に入って出荷者は52戸に、商店は30店を超し、約300万円分のモリ券が町を潤した。木の駅が暮らしに浸透してきた。これまでの3期でモリ券長者ベス



ト3は毎回入れ替わり、新しい人が加入して競い合っている。一方、商店ベスト1は毎回森林組合購買部で、ソーチェーンやトビがよく

ト3は毎回入れ替わり、新しい人が加入して競い合っている。一方、林組合が近くなった。遠かった森売れるようになった。そして行政も連鎖する。

(つづく)

▲「木の駅」のシステム概念図